

テロールが多くなって健康に悪いと考える人もあるようだが、それはアメリカなどの話で、平均的な日本人にとってはもっと多くのバターや牛乳を摂る必要がある。国内の酪農をもっと盛んにし、日本人がもっと多くの牛乳・乳製品・牛肉を食えるようにすることは極めて望ましいことである。ただ牛肉は今までのように高価・贅沢な霜降肉ではなく、脂肪分の少ない並肉・中肉をもっと愛用するのが国民経済上必要なことである。

むすび

日本農業の将来について、かなり悲観的な意見

も多いが、米と野菜と果物は政治がしっかりしていれば十分に自給でき、その自給体制を整備するのに極端に大きな犠牲を払う必要はない。酪農は今まででも米などに比べると、消費者に対しそれほど大きな迷惑をかけず、大体において自力で今日まで発展して来た。今後も、ほんの僅かの援助によって十分な国際競争力をもちつづけることが可能と思う。国土が狭いので他の国に比べてどうしても集約的になるのは止むを得ないが、しかし経営合理化を進め、国際競争力を高めることは十分に可能である。

自給飼料の効果的な生産について

千葉県専門技術員 小池 裕謙市

自給飼料の展望

わが国の零細な酪農が極めて短年の間に、古い歴史をもつヨーロッパ水準にまで多頭化されたことは予想されなかっただことである。このように速いテンポで多頭化が実現できた背景にはいろいろな要因があるが、第1にはアメリカをはじめとする主要な穀物生産国の余剰穀物が極めて安価に輸入されたことであろう。

筆者はちょうど数年前から飼料作物の普及指導の任に当ったが、当時、多頭化には濃厚飼料と稻わらさえあれば事足りて、自給飼料の生産を口にするとはいささか気がひけたもので、せいぜい消化障害の出ない範囲にという雰囲気であった。

事実、手間のかかる飼料作物を作るよりも、安い穀物と入手しやすい粗飼料をつかって、多頭化した方がもうかっただし（今も体质的には変わらないが）、またそれが当時の高度経済生長に副った対応型態として、多くのものが当然のこととして多頭化をすすめていた。

しかし石油パニックを契機に、総ゆる資源の問題や人口問題、気象問題等が一挙に爆発し、酪農の飼料問題も手の裏を返すように再び自給飼料の必要性をとなえるようになった。

これらのことについては既に多く語られていることで今更繰返すまでもないが、情報化時代とはいえ、複雑な国際社会の中での外給依存が、いかにもろいものであるか貴重な経験として銘記すべきことであろう。

とくに世界人口2倍増の問題は、もはや10年先に迫っていることはよく知られていることであり、また地球規模での気象異変は、毎年どこかでその現象をみることができる。いまのような穀物利用の延長が果して可能かどうか心配である。

酪農は10年とか20年という単位で築かれるのが本来の姿であろう。当面の経済性もさることながら、これらの問題を改めて思い起し、長期的視点の中で酪農飼料問題は考えるべきであり、このような認識によってのみ自給飼料の基本的意義があるものと思われる。

自給飼料の使い方を考える

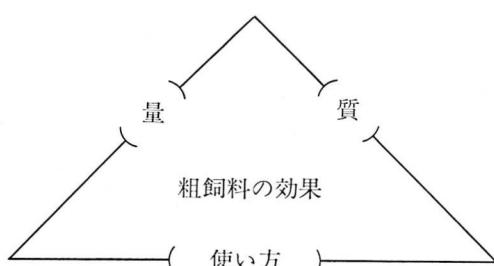
ゴールのない多頭化も経済の低成長ムードの中でようやくマイペースを築くべきしがみえてきた。しかし一挙に多頭化された経営の体質改善には、まず量としての粗飼料の安定確保が先決にして、多頭経営の効果もこの問題を抜きにしては成立たない。共同生産や受委託などを積極的にとりあげる必要があるが、安定化には相当の年月をかける以外はない。併せて酪農技術のあり方についても常に検討しながら進めることが望まれる。

多頭化ムードの中で牛の能力や飼料基盤を着実に築いてきたものは、更に多頭経営に劣らない成果をあげることが課題であり、一層の技術水準を高める努力が必要となる。

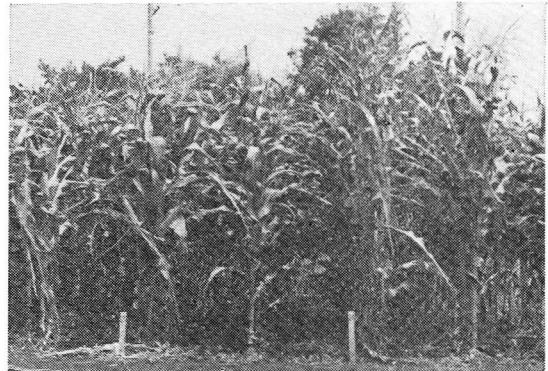
自給飼料の生産は、これらの経営条件に調和させた作り方を考えるとともに、酪農収益を高めるにはいまの乳価条件からみて、できるだけ産乳量を高めることができがもうけにつながるから、牛乳生産に反映するような自給飼料の利用法を考えなければならない。(第1図)

養分比較では、現在の濃厚飼料のTDN 1kgの価格が約100円であるのに対して、飼料作物の生産費を平均的にみるとほぼ2分の1、能率的生産では3分の1であるから、明らかに自給飼料生産の有利性は見出される。

しかし単に有利というだけで、質の悪いものを当たりに大量給与していたのでは牛乳は出ない。自給飼料を主体に、よりよい成果をあげるには、粗飼料利用性の高い能力牛を基礎に、飼料作物の種類や収穫の時期、方法をよく研究し、バランスのよい給与方法を考えることが必要である。



第1図 経営条件と粗飼料利用



スノーデント

筆者の調査経験では、良質粗飼料を十分に給与し、ビール粕をじょうずに組合せている場合に泌乳量が高く、経営や牛の健康状態の安定している例が多い。これは単にビール粕の効果だけでなく、このような酪農家は飼料の給与構造に対する研究心が強く、かつ酪農全体の技術水準の高いことがわかった。

逆に粗飼料が不十分で多頭化の先行し、粕類を用いている場合は例外なく牛の状態が悪く不安定である。また濃厚飼料を多く用いていても、粗飼料の利用法の悪いものは必ずしも産乳に反映せず、むしろ繁殖障害で悩んでいるものが多い。要するに粗飼料利用の効果を高めるには、自分の経営条件にマッチする量と質と使い方の関係をよく考えることが必要である。

輪作多収を基本にする

酪農先進国のニュージーランドやヨーロッパを見聞して牧草が雑草のように生えているが、なぜ日本では牧草つくりにこんな苦労をするのかとよくいわれる。また北海道の人が夏に西南暖地の草地をみて唖然とするが、そもそも日本内地では寒高地を除いて、夏の2~3ヶ月は夏作物の季節であり、牧草が夏枯れするのは当然である。その関係は第2図でよく理解できよう。

総ての作物は季節のリズムにのって発芽再生し、生育し、養分を貯蔵する。日本に適するその典型的作物は稻と麦である。飼料作物も夏型と冬型に分れる。夏型作物又は暖地型牧草は概ね20°C以上でよく生育し、冬型作物又は寒地型牧草はそ